

RL355：2017案に対するコメント

No.	コメント提出者 (敬称略)	条項 No.	行 No.	コメント 区分	コメント内容	提案	JAB 事務局対応案 (凡例 ○：採用、△：修正等、 ×：不採用)
2017年6月11日							
1	荒木	目次	最終行	E	付属書と附属書の使い方が混乱しており、読み難い。 実際の附属書中の記述は、付属書となっている。	「認定の基準」についての指針—化学試験— 付属書	化学分科会で検討した結果△： JIS 表記に合わせて、“附属書” で統一して採用
2	荒木	序文	赤字部分	E	付属書と附属書の使い方が混乱しており、読み難い。	本指針の 付属書 A に採用している CITAC/EYRACHEM GUIDE の表 B が 変更になっており、本指針の使用者に早 急に対応して貰う必要があるため、 本指 針の付属書 A のみを改訂する。	化学分科会で検討した結果○： 採用
3	荒木	序文	赤字部分	Q	同上	できれば、 本指針の付属書 A (xx 頁から yy 頁) と入れていただけると、ユーザーフレンドリ ーになるのではないのでしょうか？	化学分科会で検討した結果×： 不採用 他の指針等の JAB 文書に整合させ た
4	荒木	表 B2	ピペッター /ピペット	T	質量法による真度と精度のチェ ックとあるが、原文は accuracy and precision であ る。	Accuracy は精確さであるが、ここは真度 でよいと考えます。 真度* と記載し、*「原 文は accuracy であるが真度とした」と 欄外に記載する。	化学分科会で検討した結果○： 採用
5	荒木	表 B2.1	iv)	T	精確さ、精度、安定性、ラン	真度 、精度、安定性、ランピング特性と する。	化学分科会で検討した結果○： 採用

注：コメント区分には、必ず「G（全般に関するコメント）」、「T（技術的コメント）」、「E（編集上のコメント）」又は「Q（質問）」の区分をご記入ください。

No.	コメント提出者 (敬称略)	条項 No.	行 No.	コメント 区分	コメント内容	提案	JAB 事務局対応案 (凡例 ○:採用、△:修正等、 ×:不採用)
					ピング特性とあるが、原文は trueness, precision, stability, ramping characteristicsである。		採用
6	荒木	表 B2.1	V)	T	時間的繰返し操作の精確さと 精度とあるが、原文は trueness and precision of time routinesである。	時間的繰返し操作の 真度 および 精度 と する。	化学分科会で検討した結果○： 採用
7	荒木	表 B2.2	ii)	T	精度、精確さ、脈流の無いこ ととあるが、原文はpressure, precision, trueness, pulse-freeである。	圧力、精度、 真度 、脈流の無いこととす る。	化学分科会で検討した結果○： 採用
8	荒木	表 B2.5	i)	T	選択波長の精確さ、精度、安 定性とあるが、原文は trueness, precision, stability である。	真度 、精度、安定性とする。	化学分科会で検討した結果○： 採用
9	荒木	表 B2.5	iii)	T	直線性、精確さ、精度とある が、原文はlinearity, trueness, precisionである。	直線性、 真度 、精度とする。	化学分科会で検討した結果○： 採用
10	荒木	表 B2.7	i) と iii)	T	どちらもTruenessを精確さ と訳している。	真度 とする。	化学分科会で検討した結果○： 採用

2017年6月12日

注：コメント区分には、必ず「G（全般に関するコメント）」、「T（技術的コメント）」、「E（編集上のコメント）」又は「Q（質問）」の区分をご記入ください。

No.	コメント 提出者 (敬称略)	条項 No.	行 No.	コメン ト区分	コメント内容	提案	JAB 事務局対応案 (凡例 ○：採用、△：修正等、×：不採用)
1	佐々波浩一	3 ペー ジ序文	18 ~ 19 行 目	T	CITAC/EURACHEM GUIDE Third Edition と いう文書は存在しないが、 EURACHEM/CITAC Guide Third Edition とい う文書は次の 2 文書が存在 する。 文書 1 Guide to Quality in Analytical Chemistry An Aid to Accreditation (QAC 2016) 文書 2 Quantifying Uncertainty in Analytical Measurement (QUAM:2012) ここでは文書 1 のことを意 味していると思われるが、 文書 2 と誤解されないよう に正しく表記すべきであ る。	CITAC/EURACHEM GUIDE Third Edition を EURACHEM/CITAC Guide “Guide to Quality in Analytical Chemistry An Aid to Accreditation “ (QAC 2016) (以下 EURACHEM/CITAC Guide QAC 2016 という) に変更する。	化学分科会で検討した結果○：採用 EURACHEM/CITAC Guide “Guide to Quality in Analytical Chemistry” (QAC 2016) (以下、 EURACHEM/CITAC Guide QAC 2016 と記す) としました。
2	佐々波浩一	42 ペー ジ 付 属	1 行 目	T	同上	CITAC/EURACHEM GUIDE Third Edition を	化学分科会で検討した結果○：採用 EURACHEM/CITAC Guide QAC 2016

注：コメント区分には、必ず「G（全般に関するコメント）」、「T（技術的コメント）」、「E（編集上のコメント）」又は「Q（質問）」の区分をご記入ください。

No.	コメント提出者 (敬称略)	条項 No.	行 No.	コメント 区分	コメント内容	提案	JAB 事務局対応案 (凡例 ○：採用、△：修正等、×：不採用)
		書 A				EURACHEM/CITAC Guide QAC 2016 に変更する	としました。
3	佐々波浩一	42 ページ 付属書 A 表 B1	2 行 目	T	「校正と校正に関する要求事項」では意味が通らない。また、原文のタイトルには「要求事項」などとは記載されていない。原文に忠実に訳すべきである。	原文は Guidance on calibration and calibration checks of laboratory equipment であるので「装置・器具の校正と校正チェックに関するガイダンス」に変更する。	化学分科会で検討した結果△：修正採用 装置・器具の校正とキャリブレーションチェック (calibration check) のガイダンスと修正しました。
4	佐々波浩一	42 ページ 付属書 A 表 B1	最終 行	T	最終行※2に「完全にトレーサビリティな校正以外の校正は、内部校正でもよい」と記載されているが、この表現では、内部校正は完全にトレーサビリティな校正ではないと誤解されるおそれがある。原文にもこのような記述はない。	最終行※2を削除する。	化学分科会で検討した結果△：修正採用 表中を“ <u>内部校正※2</u> ”とし、 欄外の説明を次のように修正しました。 <u>※2：内部校正は、当該試験所による参照標準を用いた校正である。</u>
5	佐々波浩一	42 ページ 付属書 A 表 B1	中 欄 の タ イ ト ル	T	「校正に関する要求事項」とされているが、この表は校正のみならず校正チェックのガイダンスでもあり原文通り記載すべきである。	原文は Requirement であるので単に「要求事項」とする。	化学分科会で検討した結果○：採用
6	佐々波浩一	42 ページ 付属書 A 表 B1	右 欄 の タ イ ト ル	T	校正頻度とされているが、校正のみならず校正チェックの頻度でもあり原文どおり記載すべきである	原文は Suggested frequency なので単に「推奨される頻度」とする。	化学分科会で検討した結果○：採用
7	佐々波浩一	42 ページ	天 秤	T	3) 参照分銅を用いた校正と	3) 参照分銅を用いた校正を削除する。	化学分科会で検討した結果×：不採用

注：コメント区分には、必ず「G（全般に関するコメント）」、「T（技術的コメント）」、「E（編集上のコメント）」又は「Q（質問）」の区分をご記入ください。

No.	コメント 提出者 (敬称略)	条項 No.	行 No.	コメン ト区分	コメント内容	提案	JAB 事務局対応案 (凡例 ○：採用、△：修正等、×：不採用)
		ジ 付 属書 A 表 B1	の 中 欄		あるが原文にはこのような 記述はない。そもそも参照分 銅を用いた内部校正も適切 である限り完全にトレーサ ブルな校正に含まれる。		EURACHEM/CITAC Guide QAC 2016 の要求 が厳しすぎるので、現実に即した対応とした。
8	佐々波浩一	42 ペー ジ 付 属書 A 表 B1	天 秤 の 右 欄	T	推奨される校正頻度が原文 と異なる。原文と整合させる べきである。	原文は Annually in the first 3 years, followed by less frequently, based on satisfactory performance であるので「導入後 3 年間は毎年、そ の後は満足できるパフォーマンスに基 づき頻度を減じる。」とする。	同上
9	佐々波浩一	42 ペー ジ 付 属書 A 表 B1	左 欄 の 参 照 分 銅	T	原文は Calibration weight(s) なので校正用分銅 と訳すべきである。	校正用分銅に変更する。	化学分科会で検討した結果△：修正採用 校正用分銅 (<u>参照分銅</u>) としました。 「校正用分銅＝参照分銅」と明確に認識できよう に“参照標準”を併記した。 ※参照 JAB RL331 「測定のトレーサビリティに ついての指針」4.11
10	佐々波浩一	42 ペー ジ 付 属書 A 表 B1	左 欄 の 実 用 分 銅	T	原文は Check weight(s) なの で点検用分銅と訳すべきで ある。	点検用分銅に変更する	化学分科会で検討した結果△：修正採用 点検用分銅 (<u>実用分銅</u>) とする。 これも参照分銅 同様、 「点検用分銅＝実用分銅」 を明確に認識できるように表示した。
11	佐々波浩一	42 ペー ジ 付 属書 A 表 B1	実 用 分 銅 の 中 欄	T	表現が原文と異なる。原文と 整合させるべきである。	原文は Check against calibrated weight or check on balance immediately following traceable calibration なので、校正された分銅を 用いた点検、又はトレーサブルな校正 直後の天秤を用いた点検 とする。	化学分科会で検討した結果△：修正採用 1) 校正された分銅(参照分銅)を用いた点検 2) 校正直後の天秤を用いた点検 とした。

注：コメント区分には、必ず「G（全般に関するコメント）」、「T（技術的コメント）」、「E（編集上のコメント）」又は「Q（質問）」の区分をご記入ください。

No.	コメント提出者 (敬称略)	条項 No.	行 No.	コメン ト区分	コメント内容	提案	JAB 事務局対応案 (凡例 ○：採用、△：修正等、×：不採用)
12	佐々波浩一	42 ページ 付属書 A 表 B1	参 照 温 度 計 (熱 電 対) の 中 欄	T	2) に参照温度計による校正とあるが原文は check であり整合しない。	原文は Check against reference thermometer なので、参照温度計を用いた点検 とする。	化学分科会で検討した結果△：修正採用 参照温度計 <u>(ガラス製温度計)</u> による点検とした。
13	佐々波浩一	42 ページ 付属書 A 表 B1	実 用 温 度 計 と 熱 電 対 の 中 欄	T	校正とあるが原文は check であり整合しない。	原文は Check against reference thermometer at ice-point and/or working temperature range なので 氷点及び/又は使用温度範囲における参照温度計を用いた点検とする。	化学分科会で検討した結果△：修正採用 表内は採用して※3 を付記して修正し、 欄外に、 <u>※3：原文は Check (点検) であるが、試験方法によっては校正が必要な場合がある。</u> と記述しました。
14	佐々波浩一	43 ページ 付属書 A 表 B2	右 欄 の タ イ ト ル	T	校正頻度とあるが、これは校正の表ではない。原文通りとすべきである。	原文は Suggested frequency なので 単に「推奨される頻度」とする。	化学分科会で検討した結果○：採用
15	佐々波浩一	43 ページ 付属書 A 表 B2	天 秤 の 中 欄	T	原文は check weight なので 点検用分銅と訳すべきである	実用分銅は、点検用分銅に変更する。	化学分科会で検討した結果△：修正採用 点検用分銅 <u>(実用分銅)</u> としました。

注：コメント区分には、必ず「G (全般に関するコメント)」、「T (技術的コメント)」、「E (編集上のコメント)」又は「Q (質問)」の区分をご記入ください。